

その他

樺太に生まれて

愛知県 佐藤 昇

一 内洲平野の開発

樺太栄浜郡落合町深草は、明治四十四年に樺太開発の一端として北海道で編成、新天地を目指した夫婦家族で構成された開拓団であり、当地には三十家族が入植したのでした。

入植した家族の中に母の従姉妹夫婦がおり、その夫婦（私たちにとっては伯父夫婦）には子供がなく、母は養女として迎えられ、大正七年に十七才で樺太に渡り、軍隊を退役した私の父（母の従姉妹の夫の弟）と

大正九年に結婚しました。その後、未開地二戸分の払い下げを受け入植開墾し、生活もようやく安定してきたところに、突然の山火事で家屋敷が類焼し、家財（大切な農機具など）、家畜（豚・鶏）を失ってしまいました。

そのころ私たちの村落から東、約十キロメートルの内洲川流域に建設が進められていた製紙工場が本格稼働となり、それまで工場直轄で行っていた造材部の作業が下請化され、伯父（父の兄）もそれに参加していました。家が焼失した父は、その兄のすすめで屋敷内に家を立て、仕事の手伝いと農地の耕作をするようになったとのことでした。

二 樺太の産業発展

当時は、南樺太（北緯五十度以南が日本領土）の開

発が急速に進み、亜庭灣の大泊港を起点に敷香まで東海岸の樺太本線、西海岸の本斗―真岡―久春内を結ぶ真岡線、更に豊原と西の不凍港真岡間の豊真線など、豊原中心の交通網が整備され、これらと併行して工鉦業及び林業が開発されたことでした。工業では豊富な森林を活用してパルプ製紙工場が南から順次稼働し、昭和五年の恵須取の稼働を最後に、製紙工場の建設は終了しました。

これまでの開発資金は、国と民間資本が合併で行ってきたのですが、開発が一段落したことから資本金の整理が行われ、鉄道の全部を国家が買収し樺太庁の管轄とし、また、製紙工場全部を合併、王子製紙が運営することとなりました。

樺太には良質な石炭の埋蔵量が多くあり、各地で採掘されていました。その中でも、豊原の西の川上炭山、恵須取の北の太平洋鉦（塔路）で掘り出された石炭はそれぞれ「川上炭」「塔路炭」と呼ばれ、火力発電所・家庭燃料として利用されていました。また、落合の市街地から西三十キロメートルの所にある内淵炭山も昭

和十年ごろに試掘が行われ、開発されることになりました。

樺太の主要産業であるパルプ製紙の各工場は、山から出された原木（松類が主）輸送に川を利用できる場所につくられていました。落合工場の原木は、市街地から西五十、六十キロメートル付近で伐採、内淵川上流にある美保の集木場まで馬で運搬し、そこに積み置かれ、春になって内淵川の流水が少なくなる時期を待つて、川に落とされ流送されたのでした。

毎年、三月から六月中ごろまでは雪崩などの危険もあり、山中の本格的作業はできず、その期間に、山の作業で傷ついた馬の療養が私の家で行われ、毎年三頭か四頭が療養していました。傷が治った馬は、体力回復と使う人の訓練を兼ねて、農耕に従事したのでした。

三 わたしの出生と小学校時代

私は、落合町深草で昭和五年二月十五日に三番目の子として出生、零下三十度以下の寒い朝、日の出のころに生まれたことから「昇」と名付けられたと聞いております。

その後、父は体調を崩していたとのことでしたが、入山者の世話や畑仕事に追われて十分な休養ができずに働き、昭和十年の春に町の岩田病院に入院、二百日余りの療養の末、その年の十一月にこの世を去りました。

昭和十三年には内瀨炭の油化が決定され、私の家の開拓地もその工場の用地として買収されたのでした。

その頃の日本は支那事変、ノモンハン事件、そして昭和十六年十二月、第二次世界大戦へと進んでいました。

昭和十五年は、皇紀二千六百年を祝った年であり、南樺太は植民地（外地）扱いから日本内地と同じ扱いとなり、本籍地を移せるようになりました。さっそく私の家族は、伯父家族と共に手続きを取り、宮城県本古郡から樺太栄浜郡落合町深草に本籍を移しました。

ノモンハン事件後、樺太防衛に踏み切った日本は、国境線に近い気屯に司令部を、古屯に基地を設置、補給路としての上敷香・古屯間に鉄道を敷設し、防衛に当たったのでした。

昭和十六年、日ソ不可侵条約締結後は、南樺太の政治・産業の中心地である内瀨平野の基地化が進められ、落合町大谷では当時の重爆撃機が発着できるような飛行場の拡張工事が始まり、昭和十七、八年には付近の住民及び児童・生徒も勤労奉仕に交替で参加しました。私たち農村の小学校は、出征兵士のいる農家の奉仕作業があり、対象外でしたが、特別に希望し十八年七月に参加しました。

その年の十月中旬に飛行場の完成祝いがあり、それに招待され、練習機のアクロバット飛行、輸送機からのパラシュート降下、爆撃機による爆弾降下などを見、その後整備工場、重爆撃機、練習機の内部見学がありました。

昭和十四年に始まった内瀨鉄道の敷線工事も、昭和十五年には大谷・黒川間が開通、黒川・内瀨間の工事が本格的に進められました。

当時、私はタコ部屋を見て過酷な実態を知ることができました。タコ部屋の宿舎は、二階部屋で窓に格子が取り付けられてあり、また階段下には監視部屋がありシェ

パード犬が常時監視していたようでした。

昭和十七年には西内洲までの鉄道が全線開通し、そして樺太人造石油(石炭油化)株式会社東内洲工場が本格稼働しました。その頃の伯父は、美保(内洲)の事業所を縮小し、昭和十五年秋に真縫に事業所を開設、住居も深草から落合市街に移して事業を続け、深草の家には従兄弟(父の長兄の子)夫妻が入り残務整理と造林の任に当たっていました。

昭和十六年ごろの私の家では、馬の療養もなくなり、手伝いの人も軍隊に応召したり結婚などでいなくなり、農事にも支障がでる状態でした。油化工場とか鉄道で農地が減少し、造材関係の仕事が無くなるのを知った母は、農業の多角化を図り、豚、鶏、牛の飼育を始めたのでした。一方、開発による農地の減少、更に家族の老齢化も重なり、開拓された農地を捨てて移住する人がでるようになりました。

そのころ兄は豊原中学校を卒業し、弘前高等学校に入学、家には私と母と姉、小学二年の弟、その下の妹の五人で暮らしていました。母は家事と豚、鶏の世話、

姉は牛の世話(搾乳は柔らかい手の人がよい)と農作業、私は馬の世話と農耕、牛乳輸送缶(一斗五升||約二十七リットル)を通学路にある集乳所まで運搬し学校に通ったのです。

昭和十七年秋、集乳所が火災で焼失したため、自分たちで販売先を探し売るようになりました。

昭和十八年春に子牛が生まれてからは、一日平均一斗八升も乳が出るようになり、搾乳も三〜四回となり農作業に手が回らず、飼育を他人に頼むことにし、酪農で成功された岡さんに委託したのですが、秋には乳房炎が悪化して死んだとの連絡がありました。

そのころ、ようやく外地法に代わって内地法が施行され、土地の所有権が国から個人に移り、土地の売買が個人対個人でできるようになりました。私の母は、自分たちが開墾した土地が買収され、子供たちの将来は農業以外で生計をと考え、伯父に学資金を含めていろいろと相談したところ、兄の将来に亘る学資と姉を洋裁学校に入れる資金は出すから、開拓地は守ってほしいと言われたのでした。

その後、伯父が苦勞して開拓した土地の名義を兄の名で登記、更に、開拓途上で断念し転職放棄した開拓地の中で、既に開墾されている畑地の取得人に参加したのでした。

昭和十八年四月、国民学校高等科二年に進学するとともに、少年航空兵、海軍志願、さらに幼年学校の宣伝と志願者募集がありました。当時の学校長（当年四月赴任）は、「君たちが宣伝に惑わされる気持ちに分かるが、大切なのは学業であり将来を決める大切な年である、どうしても行きたい人は卒業してからも遅くない。今は勉強が一番、余裕のある人は食料増産で家の農作業を手伝ってほしい」と校長から説得された私たちの同級生には、終戦まで兵隊志願はなかったと思います。このころから戦局が不利になり、アッツ島をはじめ南方各地での玉砕のニュースが伝わり、日本軍の不利が明らかになってきました。

昭和十九年二月、私はそのころ官費で入学できる専門学校を受験し合格していましたが、働き手がなく、また豊原の寮においては家業の手伝いもできなくなると

考え入学を断念したのでした。

四 終戦直前の生活

昭和十九年三月末、私は樺太公立深草国民学校高等科二年を卒業、家業である農業に専従することになりました。最初に畑地、牧草地と、供出割り当て量の関連を登記の内容と比較したところ、畑地が二町歩（二ヘクタール）、牧草地が一町歩不足していることに気づき、さっそく伯父の家に行き内容を確かめました。

畑地は渡瀬地内にあり、五年毎の契約で貸しているが、無償であり必要であればいつでも返してもらえ、牧草地は開拓地内の沼をこえた北端にあり、近所の農家が使っているとのことでした。私と母は、渡瀬の農家に行き燕麦の供出を依頼し、牧草地は手入れ不足から雑草が多く繁茂しており採草地に不適当と判断、一日耕して蕎麦（雑草に負けない）を作ったのでした。

昭和二十年になると農村の二十代・三十代の男子は召集され、残っていたのは青年学校、婦人会の軍事指導員ぐらいでした。青年学校は当初、週二回の夜間学習と軍事訓練でしたが、週一日の軍事訓練、更に月一

回合宿訓練、一年に一度は豊原の軍事訓練所でテストが行われ、私たちも参加しました。婦人会では、週に四時間、防災訓練（空襲）と竹槍の訓練が強制的に行われていました。

一方、落合山に横穴を掘り、防衛陣地作りをしていた部隊が、耐乏訓練（最少の食事で行う）と称する行軍、軍事訓練を行ない、岡さんの牧場に指揮所を置き一カ月ぐらいつづきました。牧場は立入禁止となり様子は分かりませんが、町道（通学路）から見ると大きな建物が二棟新築され、間にテントが張られており、炊事の煙が上がっていました。軍事訓練は鉄道線路沿いに通路を作り、兵隊たちはそこを出て国道、町道周辺で訓練を行っていました。行軍する兵隊は何か食べ物がなにかと、キョロキョロしており、それを見ると何となくタコ部屋を思い出し情けなく感じました。

六月末ごろから、夜中になると国道に馬車の音が響くようになりました。窓から見ると馬に引かせた大砲やテントをかけた軍需品で、夜間に運搬されていたの

でした。

七月末、馬車をもって黒川駅集合の命令があり、私が行ってみると、周辺駅の農家の馬車がきており指示を待っていました。列車が入り貨車ホームに停車、駅から航空の少尉がでてきて運搬物が知らされたのです。それは、木箱に入った五十キロと三十キロの爆弾（外から中身が見える）でだれにも気付かれないように運ぶことでした。行き先、荷下ろしの作業の時間などを打ち合わせ、六台の馬車に百二十本積み込み、むしろを掛けて縛り、先頭の馬車がでてから十五分毎に出発、深草の牧場の西に新築した民家に運び入れたのでした。

八月になると戦局は悪くなる一方で、樺太の都市爆撃も時間の問題だと思われました。伯父も疎開をと考え、私の家の倉庫に、当面の間の食糧と家具を先に疎開させました。その後、広島、長崎に新型爆弾（原子爆弾）投下のニュースが伝わり、その実態は分かりませんが、何となく恐ろしく感じました。そして八月九日にはソ連の侵攻が始まり、国境周辺での戦闘が始まったのでした。

八月十二日、ソ連軍が戦車を先頭に一斉に南下し、敷香、知取方面に向かおうとしているが、山岳地帯の日本軍陣地からの攻撃で阻止されている（樺太の地形の大部分は山が海までせりでている）、との情報が最後で、以後の戦局情報は一切ありませんでした。その日の夕方、榮浜に潜水艦による艦砲射撃があり、その音を聞いて戦場が近づいたと感じましたが何ら対策もなく夜を過ごしました。

八月十五日正午に重大放送があると聞き、伯父の家に行きラジオを聞きましたが、雑音でよく聞き取れませんでした。しかし日本の降伏は知りました。その日、伯父の家では女子供の引揚げ準備で忙しく、知取の養女（私の従姉妹で夫は小学校教師）一家が到着次第出発する、その際、洋裁学校に通学している私の姉も一緒に行くから心配するなと言われました。

五 戦後、引揚げまでの生活

戦後、樺太はソ連領になり、従って日本人は間もなく全員引揚げることになりました。家では、八月十七日に肉屋を呼び、豚、鶏二十羽、兔を処分し引き取っ

てもらいました。そのころ、敷香、知取方面からの避難者の話では、日本軍はまだ戦っている（十八日ごろまで指示が届かず抗戦）、敷香の町は壊滅、逃げてくるときは米倉庫が燃えていた、などが情報として伝わってきたのです。

十九日の昼過ぎ、牧場の米倉庫が開放されたことを聞き駆けつけましたが、もう何もありませんでした。朝早く駐在所の巡査部長が、「日本人は引揚げ、最後に朝鮮人が残る。食糧は確保させる」との名目で炭鉱の車両を使い、玄米六千俵のうち内洲方面に約四千俵が運ばれたのです。

二十日朝八時過ぎから、艦砲射撃の音と飛行機の爆音が西の方から聞こえてきました。それは真岡に、ソ連軍が艦砲射撃を加え上陸、その攻撃で市街地と市民が逃げ込んだ逢坂、二股の建物は全壊、また、真岡郵便局の電話交換手（九人の乙女）が集団自殺したなどの情報がありました。

二十一日午前十一時ごろ、北西の空から見慣れない飛行機が二機、東内洲上を低空で飛来、内洲川南側の

山に沿って東進、発電所の東山麓に爆弾二個を投下して市街地の方向に飛んで行きましたが、その時ようやくソ連機と気付きましたが、脅しにきたものと判断、家に入ると間もなく爆撃音・機銃掃射の音が聞こえ、出てみると市街地から黒い煙が上がっていました。母は子供たちの学校に迎えに行き、私は大切な物、家畜の様子を確かめたのでした。

二十二日には豊原が爆撃され、二十四日には大泊で大火災（ソ連兵に暴行された女性の放火説もある）、町の大半が焼失しました。そのころ、家は母と私、弟、妹の四人の暮らしでしたが、万一を考え、その後各自の名前と引揚げ後の行き先を書いた布を衣服の裏側に縫い付けておきました。

空襲から三日後、伯父たちの安否を気遣い馬で町に入り様子を確かめました。空襲を受けた町は、落合駅前前の繁華街で、食堂、商店及び一般の住宅街でした。話によると、爆撃は二百メートル四方に限定されており、まず爆弾を四角に落として攻撃範囲を定め、その内側に焼夷弾・機銃掃射を行ったとのことでした。

爆弾の直撃を受けた建物に大衆浴場があり、その日は患須取からの避難民に特別の入浴サービス中で、被災した多くの男性が死亡したと聞きました。

町の中は、女・子供の大部分が引き揚げ、人通りの少ない寂しい町となり、伯父の家もひっそりしており、息苦しい感じがしました。それは、十八日ごろ大泊を出港した引揚船が留萌沖で国籍不明（後でソ連と分かる）の潜水艦に攻撃を受け沈没とのニュースがあり、家族の安否が気になり心は極限状態だったからです。

八月二十六日、落合市街にソ連軍が入り、落合山の軍事基地、各設備が接収されました。東内渕の油化工場・西内渕の炭鉱の接収は三十一日であり、その日は九時ごろから三台のジープと呼ばれた無蓋の四輪駆動車に自動小銃を外に向けて構えた兵隊が乗っており、その後には大型の兵員輸送車が続いていました。

翌九月一日、こんどは二頭立ての四輪馬車が四台きて、私が微発を恐れて隠していた馬も見つかり連れていかれたのでした。

九月三日、私が家の近くで芋掘りをしていたとき、

家の前の国道に二台の四輪馬車が止まったのに気づき急いで家に向かいました。ソ連兵はすでに家の中に入っており、指揮官（下士官）が座ったままの母と握手で挨拶していました。私が玄関から中に入ると、突然ソ連兵が振り返り、その中の一人が「チトー（誰だ）」と叫び自動小銃を私に突き付けたのですが、その時母が大声で「わしの息子に何するんだ」と叫びながら立ち上がろうとしたのです。ソ連兵は言葉は分からないがその雰囲気で察したのか銃口を下げ手まねで中に入ると合図したのです。

その後、ゆで卵と目黒豌豆の塩煮、麦茶を出して接待しました。一人の兵隊が、上がり口に座っていた母が立つのを見て、床上に上がろうとしたのですが、母に叱られてたじろいだため、上がるなら靴を脱ぎなさいと身振り手振りで分かったのです。

九月四日、国道をジープに牽引された大砲四門と装甲車、輸送車が通過しました。その部隊は岡さんの牧場に駐留していたのですが、五日には例の民家に積まれた爆弾を見つけ、その日の午後、ソ連軍の少尉

（カピタン）が隣の従兄弟に、爆弾倉庫を監視するのに夜間の状況が不明だ、日本人の人質が必要だと言い、夕方、従兄弟と私が行くと監視場所と行動範囲を指定されたのでした。間もなく夕飯の済んだ兵卒（サルダート）が四人、私たちの所に集まり、身振り手振りで会話をしましたが、九時を過ぎると一人を残して引き揚げ三人で会話と監視を続けました。会話中で印象に残ったのは、ソ連軍が持っている武器のうち大砲、自動小銃、輸送車、装甲車はアメリカ製であり、現在は借りているが、アメリカが返還を求めたら戦争に発展するかもしれない、次はアメリカが敵だと話していたことです。

そのころ、倉庫にあった米と、開放した巡査部長の行方が搜索され、九月十日には米千俵ぐらいが見つかり、部長も逮捕されたと伝えられました。

九月末、伯父の家に行くと、「引き揚げた家族は十九日に駆逐艦で出港、全員無事との連絡があったが、このままでは女たちが生活できないので俺たちは密航する。お前たちも一緒にと思ってたが無理だ。後を盛義

(親戚)に頼んでいくから」と言い残して、十月十二日栄浜を出港し北海道に向かったのです。

その後の消息は不明でしたが、十二月になって、途中で嵐に遭い、船の浸水を毛布・布団で防水・排水を繰り返して北見に無事上陸でき、その後女たちと合流し、樺太時代と変わらぬ仕事を見つけたとの連絡があったのです。

十二月に入るとソ連軍の将校に交代があり、その多くは妻子を連れての赴任で、住宅探しが始まり、隣の従兄弟は、ソ連軍の将校に同居してもらったら安心と考え提供したのでした。

二十四日(クリスマス)、黒川で殺人事件が発生しました。夜八時ごろ、馬櫓ばしりできたソ連兵が民家に「ムスメダワイ(娘を出せ)」と押し入り、その騒ぎに気づいた隣家の主人が駆けつけ、制止しようと両手を広げた瞬間に発砲、即死した事件であり、犯人の処罰、兵卒の飲酒制限、飲酒後の外出禁止をソ連軍に約束させ決着したのでした。

昭和二十一年一月末、盛義さんから、密航するから

三月十五日までに引越してこいと母に連絡があり、私たちは町に引越し、盛義さんの家の前に長屋を借りて住み込みました。

二十二日に盛義さんがうちに駆け込んできて、「どうも密告されたようだ、用心のため家にはこないように」と言って帰ったが、その日の夕方に栄浜の仲間が捕まったと知らせが入り、翌朝には盛義さんと船頭さんが逮捕されました。その後同居していた大尉が責任をとらされ降格の処分となり、盛義さんの妻子はいたまれば、大町に部屋を借り転居したのです。私は密航をあきらめ、食料の配給手続きに役所へ行ったとき、偶然に会った人が青年学校の軍事指導員だった上野さんで、今は製粉・精米の工場をやっているが、働く気はないかと言われ、その場で話が決まり働くことになりました。

そして六月になって突然、配電会社の担当者が家に来て、変電所の仕事を手伝ってほしい、住居も変電所の社宅に入ってもよいとの勧誘があり、上野さんに相談し転職を決めました。六月末に社宅に転居、七月一

日權太配電公社落合支部の門をくぐり辞合を受けたのです。仕事の方は、十月末までは外線・内線工事見習い、十一月から四月末までは変電所の監視でした。

昭和二十一年九月、軍政から民政に変わり、一般のソ連人が多く入ってくるようになり、各職場に配属され始めました。

翌二十二年三月、待ちに待った引揚げが開始され誰が先か話題になりました。しかし引揚げには職場の上司の許可が必要で、若い者はいっ帰れるか分からない状態でした。

そんなとき、変電所にいた私が局長（ソ連人）に呼び出され、「会社に練場での仕事に一人の割り当てがあるが、誰も行くと言う人がいない。君が何とか引き受けてくれ」と通訳を通じて話されました。その日は家に帰り、友達に会って話をしたら、「今その話をしていたところだ。この三人も行くから是非一緒に行く」と言われ、翌日会社で局長に会い、帰ったらすぐに引揚許可を出すことを条件に行くことにしたのでした。

落合の町から総勢三十五人（女は四人）は、真岡の南、麻内に配属されました。麻内については午後二時ごろで、さっそく宿舎の掃除と寢床の割り振りを行い、外に出ると地元の漁師が水揚げしたばかりのトラバガニを大金でゆで揚げており、足を一本ずつもらいましたが、中には食べきれない人もいました。

一週間ぐらい過ぎたころ、宿舎前の線路の向かい側の民家に男たちが集団で入居するのがみられました。聞くところによると北朝鮮からの徴用者とのことでしたが、線路上にはいつも銃を持った歩哨がおり、真意は分かりませんでした。

予定は三十日間でしたが、四十五日間働いて仕事から解放されました。来るときは客車で無料でしたが、帰りは自分たちで列車の手配をし、客車は利用できず無蓋車で帰ったのでした。

職場に出てみると、事務系統の人は全員引き揚げ、残っているのは現職を含めた技術関係の人だけでした。私も引揚許可をと思いましたが、あいにく局長は入院中で、他の人のサインでは駄目なので待つようとと言

われたのでした。

そのころ、母は漬物工場で働いており、六月十五日ごろ引揚許可が出て、出発期限は許可期限ぎりぎりの七月一日に設定していました。お前の許可が出れば一緒にに行けるよう手続きが済んでいると言われました。

六月二十五日、局長が病院から外出してきたのを通訳から知らされ、さっそく交渉に入りましたが、理由をつけて拒否されました。しかし徴用に行くときの経緯を持ち出して、ようやく身分証明書にサインをもらい、その足で民生局に行き一切の手続きを済ませたのでした。

昭和二十二年七月一日、私たち家族は八時に指定された列車の貨車に乗り込みました。列車は午後六時に出発し真岡到着が翌日の十一時ごろで、荷物を下ろしてホームに出ると、作業服を着た青年が「十ループルで荷物を全部運んでやる」とそばに寄ってきました。それを見て、母が小声で「兵隊さんだね」と言ったら、周囲を見て離れながらこっくりとうなずいていました。そして七月七日、引揚船白竜丸に乗り込み、船底の

むしろの上に落ちついたとき、「ああ、これでソ連から解放された」と思いました。その気持ちは生涯忘れることはないでしょう。

六 引き揚げてから

真岡を出港して四十四時間後、函館に入港し一週間の検疫が済み、七月十六日に上陸。その日は収容所に入り入国手続きを行い、行き先別に汽車の切符と七日分の外食券を受け取り、翌十七日上野行きの列車に乗り岩手県の母の実家に向かいました。途中指定されていた駅で弁当を購入しましたが、値段の高いのと麦だけの弁当に驚きました。

伯父（母の長兄）の家に間借りをして生活を始めましたが、早く生活費を得て独立した生計をと考え、母に頼んで伯父に話してもらったのですが、働くかどうか分からない引揚者を使う人はいないと、断られたのでした。その後も母は親戚、知人に聞いて回り、ようやく砂利運搬（トロッコで貨車積場に運ぶ）の仕事を見つけ、七月二十六日から働いたのでした。

二十三年五月、仙台の兄が腸閉塞で大学病院に入院、

同居して洋裁店に勤めていた姉が世話をしていましたが、手術の繰り返しから重体となり、母が付き添いに
行きました。しかし、八月末には弟が盲腸となり一関
病院に入院したため、母に連絡し戻ってもらったので
した。

二十四年五月、釜石製鉄所の従業員募集に応募し、
入社しました。

私の生きざま

長崎県 松 永 四 郎

私は、佐世保市の片田舎の農家で育った。私の家は、
村落で一番の大百姓で、朝早くから夕方遅くまで、忙
しい毎日だった。家族は、祖父母と父母、そして私た
ち兄弟五人の九人家族で、長兄は農学校卒業後、朝鮮
で綿花栽培の枝手をしていた。次兄は交通事故で、身
障者として松葉杖の生活を余儀なくされ、通学時は、
私が兄の手足となって通った。その兄の癖には泣かさ

れたこともあった。それというのも、家を出て五分も
たたぬうちに、必ず忘れもの（紙代、保護者会費、学
用品など）を取ってきてくれと言ひ、そして言い出し
たら聞かない。また履物が気に入らない、取り替えて
きてくれと言う。あるときは、校門が見える所までき
たとき、何でもないことで家まで帰ったこともあった。
こんなことで、毎朝の全校朝会はほとんど遅刻をした。
こうした苦勞をしながらも、学校は楽しかった。

学校の帰りは兄とは別で、友達と楽しく遊びながら
帰った。杉の実鉄砲を作って撃ち合ひをした。花粉が
出るようになれば、鉄砲の弾にはならない。そこで石
を投げ、杉の花粉がパッと爆発するかのようになり、真っ
白な煙となるのを喜んだ。そのころは、花粉症などな
かったのだろうか。また、楠の実でも鉄砲を作った。
実の大きさに合わせて、竹の太さを選び作らなければ
ならない。それには小刀がよく切れることが、上手に
作る条件である。当時、私たちは誰でも小刀を持って
いた。時々切れ味比べをした。よい砥石で研磨しなけ
ればよく切れない。あるとき、「俺の小刀は髪の毛が